

[成果情報名] ヒノキ間伐材によるナメコ原木栽培技術

[要約] 2004年3月に植菌し3ヶ年経過したので、その間のきのこ発生量等を取りまとめた。ヒノキ原木の1本当たり（径10cm、長さ1m換算）の発生量は1年目より2年目の方が多く、サクラ原木と比較し約2分の1であった。植菌時の原木乾燥状態別は初期の段階で生原木の方が多く、市販の種菌別では相違が見られた。

[キーワード] ナメコ、ヒノキ、間伐材、原木栽培

[担当機関名] 林業試験場 特用林産部

[連絡先] 0739-47-2468

[部会名] 林業部会

[分類] 指導

[背景・ねらい]

U I ターン者や農山村定住者の副収入として、地域資源を活用した副産物の栽培技術が求められている。そこでヒノキ間伐材を活用したナメコ栽培技術を確立するため、発生環境の解明、原木状態及び種菌別の発生量比較検討を行い、間伐材の有効利用や山村地域の活性化を図る。

[成果の内容・特徴]

1. 市販種菌2品種のナメコ発生量を比較し、ヒノキ生原木では品種間の有意差はなく、ヒノキ乾燥原木及びサクラ原木では有意差が見られた（表1、図1）。
2. 植菌時におけるヒノキの生原木と乾燥原木（2ヶ月乾燥）を比較すると、1年目の発生量は有意差があり生原木が多く、2年目では有意差が見られなかったため、初期の段階で生原木の方が優れている（表1、図2）。
3. ナメコの適木とされるサクラ原木の1本当たりの発生量（360g）に対し、ヒノキ生原木は約6割（215g）で、ヒノキ乾燥原木は約4割（148g）となった（表1、図3）。

[成果の活用面・留意点]

1. ヒノキの間伐後すぐにナメコを植菌できる。
2. ヒノキ原木によるナメコ栽培方法及び経営指針の基礎資料とする。
3. 種菌の品種により発生量に相違がでる場合がある。
4. 植菌後3ヶ年経過により、ヒノキ原木のナメコ発生傾向がほぼ解明できたが、継続して環境状態及び発生量を調査し、発生時期及びヒノキ原木の寿命を確認する必要がある。

[具体的データ]

表1 原木環境及び種菌別の発生量調査

場所	樹種	原木状態	種菌	本数	平均直径 (cm)	平均材積 (m ³)	発生量(g)		径10cm当たり発生量(g)		径10cm換算 1本当たり発生量
							2005年度	2006年度	2005年度	2006年度	
中辺路 (温川)	ヒノキ	生	A(早生)	10	10.5	0.0087	688	1,223	610	1,086	169
			B(早生)	10	11.5	0.0104	1,475	1,500	1,441	1,168	260
		乾	A(早生)	10	10.7	0.0090	203	893	189	773	96
			B(早生)	10	11.2	0.0098	731	1,733	561	1,442	200
	サクラ	A(早生)	20	12.9	0.0131	2,451	6,916	1,453	4,187	282	
		B(早生)	20	13.2	0.0137	5,499	9,371	3,137	5,611	437	
合計				80			11,047	21,636	7,391	14,267	

注) 試験場所: 田辺市中辺路町温川地内

試験地状況: スギ・ヒノキ混交林

植菌日: 2004年3月

1本当たりの発生量: 径10cm、長さ1m(材積0.0079m³)あたりに換算し各原木ごとに算出している。発生量は2年間の総量とする。

発生期間: 2005年度(平成17年11月3日~平成18年2月2日)2006年度(平成18年11月8日~平成19年1月4日)

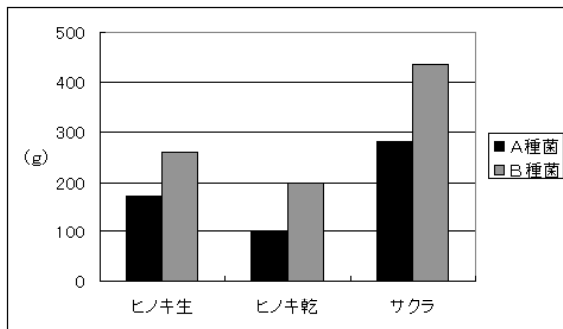


図1 種菌別発生量

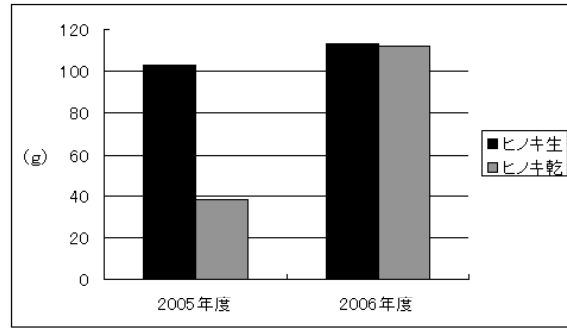


図2 原木状態別発生量

注) ヒノキ生: t検定による有意差なし

ヒノキ乾・サクラ: t検定による有意差あり(5%水準)

注) 2005年度: t検定による有意差あり(5%水準)

2006年度: t検定による有意差なし

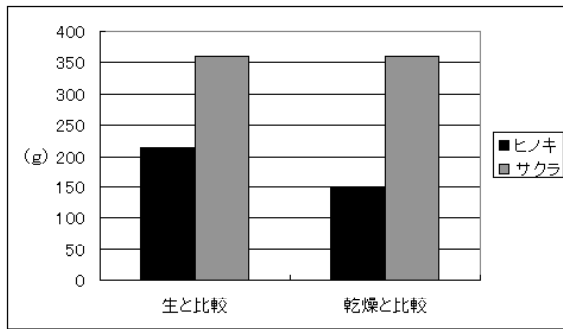


図3 樹種別発生量

注) サクラと生原木: t検定による有意差あり(5%水準)

サクラと乾燥原木: t検定による有意差あり(5%水準)

[その他]

研究課題名: 木の国いちおし産品創出

予算区分: 県単

研究期間: 平成15~19年

研究担当者: 河野孝史、城戸杉生、大槻国彦、岡田和久

発表論文等: 業務報告(平成17年度)

